

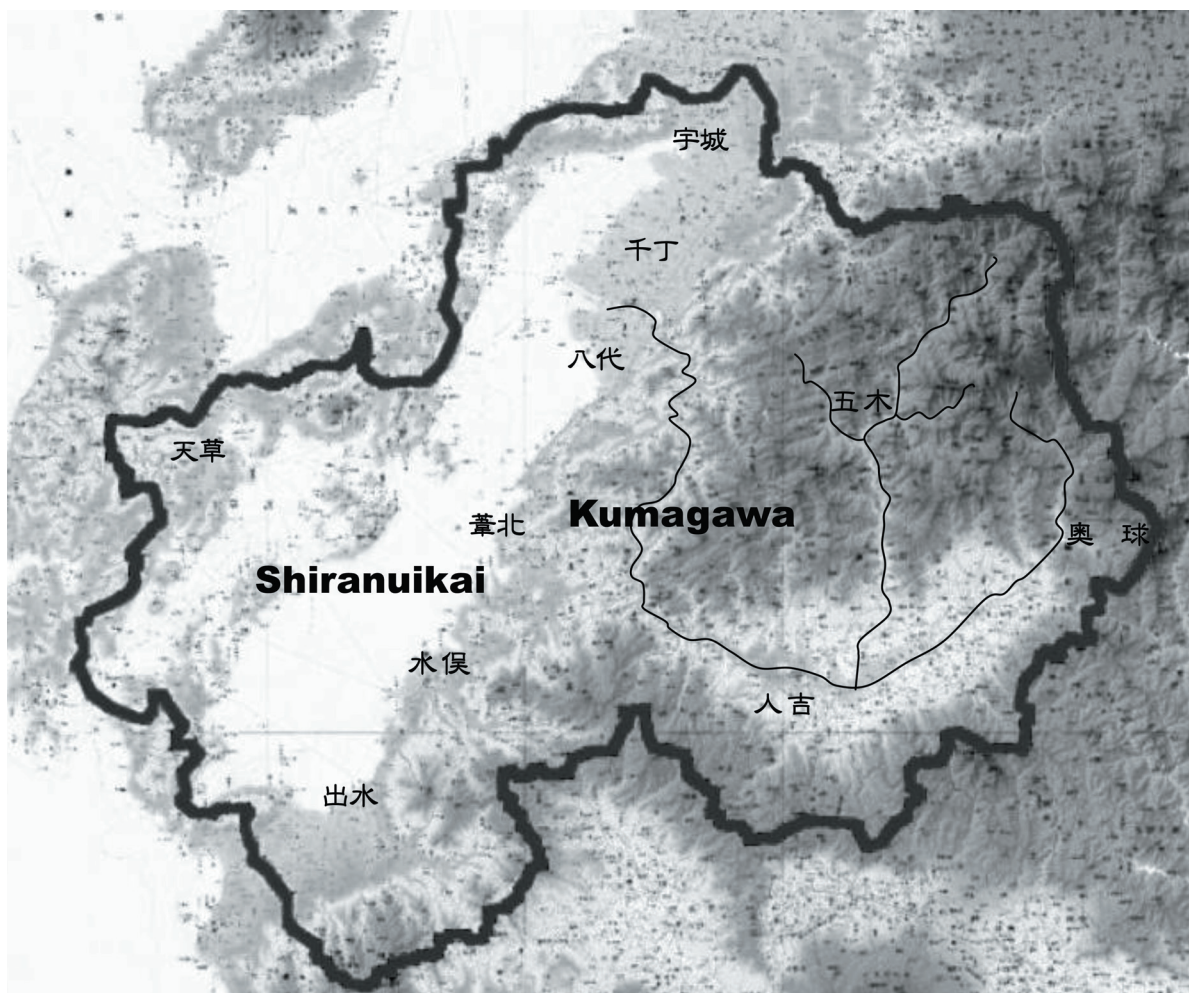
しらぬい くま

第20号

2016年3月

内容

- 平成 28 年度総会・プログラム・研究発表会・現地見学会のご案内 平成 28 年 6 月 4 日(土)～5 日(日)
- 平成 27 年度第 2 回現地見学会報告秋の五家荘の自然と平家落人の里探訪
- 白鳳丸による世界一周航海記：前半 (Tokyo - San Diego - Miami)
- 八代海沿岸の地名⑧ 五家荘と御所浦
- 球磨川流域の土砂災害の危険性
- 球磨川流域の山歩記 第 1 回・仰烏帽子山
- 「不知火海・球磨川流域圏学会誌」販売



不知火海・球磨川流域圏学会事務局

熊本県熊本市南区城南町東阿高 1136-6

Tel & Fax: 0964-26-2003

平成 28 年度総会・研究発表会・現地見学会のご案内

日時：平成 28 年 6 月 4 日（土）～ 5 日（日） 会場：熊本水産研究センター 1 階研修室

※今年度は一日目（6 月 4 日（土））に現地見学会・懇親会、二日目（6 月 5 日（日））に総会および研究発表会を行います！！

■現地見学会：天草（松島）を巡る

- ・日 時 6 月 4 日（土）午前 10 時
 - ・集合場所 三角東港（三角駅前）
 - ・コース 三角東港→登立天満宮→松島（天草五橋クルージング）→昼食→永浦島（ハクセンシオマネギ観察）→高杣島（海岸生物観察）→解散（15：00）
 - ・参加費 3,500 円（昼食代・シークルーズ代込み）
 - ・申込先 電話：0965-32-7140（つる）、e-mail: tsuru-shoko89314@hiz.bbiq.jp（つる）
 - ・申込期限 5 月 25 日
- ※後日、案内チラシを送付いたします。

■懇親会

- ・日 時 6 月 4 日（土）午後 6 時～
- ・場 所 天蔵のむら田（上天草市大矢野町登立 8798-8, tel: 0964-56-6080）
- ・会 費 4,000 円

■総会および研究発表会

- ・日 時 6 月 5 日（日）総会：10 時～ 11 時半
ポスター発表：11 時半～ 12 時半（その後も展示）
- ★第一部 基調講演：午後 1 時～ 2 時
- ★第二部 研究発表会：午後 2 時 20 分～ 4 時半
- ・会 場 熊本県水産研究センター 1 階研修室
（熊本県上天草市中 2450-2）
- ・参 加 費 研究発表会（会員：500 円、一般：1,000 円）

★第一部 基調講演（午後 1 時～ 2 時）

講師 平井 建治（天草文化協会会長）
題目 天草概史 ～郡都が富岡から本渡へ～

★第二部 研究発表会（午後 2 時 20 分～ 5 時）口頭発表

- ① 中野 誠志（熊本ダイビングサービスよかよか）
「天草のダイビング」
- ② 高橋 徹（熊本保健科学大学）
「淡水産アオコ毒素ミクロシスチンによる海域の汚染」
- ③ 廣瀬 浩司（天草市立御所浦白亜紀資料館）「天草御所浦の化石と地質」
- ④ 藤芳 義裕（FU バイオカルチャー）「アサリの種苗生産について」
- ⑤ 堤 裕昭（熊本県立大学環境共生学部）「熊本のアサリをいかにもどすか？」
- ⑥ 城本 祐助（くまもと県里海づくり協会）「くまもと県里海づくり協会の活動」



熊本県水産研究センター



研究発表会場：熊本県水産研究センター（研修室）

平成 27 年度第 2 回現地見学会報告「秋の五家荘の自然と平家落人の里探訪」

時松 雅史（熊本高等専門学校八代キャンパス）

10月24日（土）、五木村道の駅に10時に集合、今回は堤会長の研究室から女子学生4名、会計の坂井さんがお世話している高専の留学生フェリックス君（インドネシア）が参加し、総勢19名となった。この日は好天にも恵まれ絶好の見学日和となった。最初に向かったのは五木村宮園にある大イチョウの木である（写真1）。樹齢推定500年、幹周り約8.3m、根回り約14m、樹高は約54mにも及び、イチョウの木としては県下最大級の古木である。このイチョウは、文禄・慶長（1592年～1598年）の役の折に、相良藩20代長毎公とともに従軍した五木の者が、朝鮮から記念として持ち帰って植えたと言われている。地元では、このイチョウを傷つけると不吉なことが起きると言われている。逆に台風などで枝が折れても決して人を傷つせず、民家などを避けて落ちるといふから、全く摩訶不思議な大木である。



写真1 五木村宮園にある大イチョウ

つぎに我々が向かったのは泉村久連子古代の里である。道路マップを見ると普通の道として記してあるが、実際に現地へ行くと



写真2 泉村「久連子古代の里」で飼育される久連子鶏

と、初心者マークの人は運転を差し控えた方がいいかもしれない。離合ができない道が延々と続くのだから大変だ。私はとにかく対向車が来ないことを祈りながら、ハンドルを握った。ようやく目的地の久連子古代の里に着くと、早速お目当ての久連子鶏（写真2）を見学した。「肥後ちゃぼ保存会によると、久連子鶏は天草大王や肥後ちゃぼと並ぶ熊本五鶏の一つ。約300年前から久連子地区で飼われている。膨らんだ鼻孔は珍しく、長さ90cmほどになる黒い尾羽は、同地区の伝統芸能「久連子古代踊り」のかさにあしらわれている。」（熊日・平成24年10月5日）。鶏舎では広いスペースでゆったりと飼われていて、我々を歓迎しているのか、鳴き声を披露してくれた。鶏を見学した後は、山のくらしと芸能の資料室を見学した。なかなかこのような機会がないため、ゆっくり見ていたら、あつという間

にお昼になった。そこで当初の予定を変更して、一行は「せんだん轟の滝」へ向かった。

滝の駐車場で着くと早速、注文していた弁当を食べた。メニューは、やまめ塩焼・鹿の竜田揚げ・川のり入り魚すり身天・鶏から揚げ・山菜お煮メ・大根なま酢・サラダ・玉子焼き・みかん・味噌漬物・きびごはんである。お腹がすいていたせいか、どれも美味しかった（写真3）。1,000円の弁当にしては、豪勢で素晴らしいと思った次第である。昼食を終えると、滝のほうに向かった。私は滝へ通ずる歩道をゆっ



写真4 「せんだん轟の滝」で記念撮影

くりと下って行ったのであるが、滝の下の所まで来たとき、その立派な姿に圧倒されてしまった。「せんだん轟の滝」は高さ70m、幅3～4m、滝つぼ4



写真3 昼食の豪華お弁当

mの大瀑布である。環境庁が設置した看板には、「栴檀轟（せんだんとどろ）」と表記されていた。五家荘では、昔から滝のことを「とどろ」と呼んでいて、名称のあとに轟の文字が付くのが普通らしい。昔は滝周辺に栴檀の大木があったことから、そう呼ばれるようになったそうだ。とりあえず数枚写真を撮って、のんびりと滝を眺めることにした。

滝を見学した後は記念写真を撮り（写真4）、菅原道真家ゆかりの屋敷



写真5 菅原道真家ゆかりの屋敷 左座（ぞうざ）家



写真6 左座（ぞうざ）家の入り口



写真7 尾方家（平清経の子孫、緒方紀四郎盛行がここ
椎原に住み、この地を支配し、代々住んだ屋敷）

一応、ここで今回の見学は終了した。参加者全員で記念撮影をして（写真8）、それぞれのルートで帰途についた。私は一旦五木村の道の駅に行き、往路と同じ25号線で八代市に戻った。新八代駅で大和田夫妻と林氏に挨拶をして、無事に帰宅した。今回初めて五家荘まで行き、現地を見学できたのは非常に貴重な体験であった。この見学会の企画を担当していただいた佐藤先生をはじめ、つるさんには心から感謝申し上げる。

である左座（ぞうざ）家を見学した（写真5）。左座家は平安時代、道真の嫡男である宰相が藤原氏を逃れて、仁田尾に落ち延びて住みついたといわれている。家屋は約200年前、この地に移されたそうである。出入り口が3つあり、土間に荷物を入れる入口、家族の者が通常使う出入り口、さらに客人が出入りする玄関がある（写真6）。我々はその玄関から屋敷内へ入った。室内には古い甲冑や古文書が展示されていた。囲炉裏のある部屋で、ガイドの方から茅葺屋根の説明を受ける。話によると、萱の屋根は囲炉裏の煙で蒸されることで60年もつらしい。しかし、現在は使われていないため、屋根の萱に湿気がこもることで傷むのが激しく、25年ぐらいいかもたないという。とくに、カブトムシの幼虫が住みついていて、カラスがこれを食べようと萱をめくるため、いっそう屋根の傷みがひどくなるのが、悩みの種らしい。昨年屋根の吹き替え工事が行われ、原料の萱は阿蘇から運び、職人は大分から招いて作業に当たってもらい、3,000万円ほどの経費を要したそうだ。ガイドの方は、「これでは25年に一度新築の家を建てるようなものだ」と語っていた。農村の景観に溶け込む茅葺屋根の家は、我々を和ませてくれるが、実際に維持しようとなると、大変であるということを今回の見学で痛感した。

続いて緒方家を見学した（写真7）。緒方家は平家一党のうち、左中将平清経が源氏の追討を逃れるために、豊後の鶴崎港を経て、竹田領の士族緒方氏の招きでしばらく居住後、姓を緒方と改め、九州脊梁の白鳥山（泉町樺木）に住みついたとされる。姓を緒方に変えた平清経の子孫、緒方紀四郎盛行がここ椎原に住み、この地を支配し、代々住んだ屋敷が尾方家である。平成2年（1990）までは旅館として営まれていたが、平成4年から一般公開が始まった。中に入ると、ガイドの方がまず案内してくれたのは、薄暗い床の間であった。ここには高さ30センチのドア付の棚と、その下に書院造と呼ばれる違い棚があった。説明によると、ドア付の棚は「天ブクロ」と呼ばれ、敵の生首を保管するための施設だったという。それまで笑顔で見学していた我々も、さすがに黙り込んでしまった。続いてガイドの方から、屋根の構造や300年前の土壁について説明を受けた。緒方家の茅葺屋根は原料の萱を宮崎県のえびの高原から運び、職人は佐賀から呼び寄せたそうである。やはり左座家と同じで、

屋根の修復に経費がかかるのが悩みの種のようなであった。



写真8 現地見学会を終えて、集合写真

白鳳丸による世界一周航海記：前半（Tokyo - San Diego - Miami）

大和田 紘一（不知火海・球磨川流域圏学会前会長）

はじめに

白鳳丸による初めての外国への航海については、以前に紹介しましたが、それから20数年が経過し、大分本船も古くなってきました。新白鳳丸の建造については東京大学海洋研究所から申請をしてきたのですが、大分待たされた後に、1989年にやっと建造されました（写真1）。私は久しぶりに白鳳丸に乗りたいと、この年は6月のテスト航海から乗船していました。この船は、100 m位の長さで最新鋭の4,000トンクラスの立派な研究船で、速力は16ノットで走ります。私たちの微生物研究用の研究室は、クラス1,000の実験室と、奥にはさらにクリーン度の高いクラス100の部屋があって、入り口に



写真1 1989年に新造船された白鳳丸（東京大学海洋研究所）

はエアシャワーまで備えてありました。これは、海水中の微量化学成分を研究するために外部からの汚染を防ぐために作られたもので、私たちの微生物研究用のためのものでないことが、後で分かりました。立派な研究船を諸外国にもお披露目する意味もあって、世界一周航海が企画され、私は東京からマイアミまでの前半だけ参加することになりました。

1 Leg.(Tokyo -San Diego)

Legは航海日程の区切りです。白鳳丸は、1989年10月27日に関係者の見送りのもとに母港の晴海埠頭を出港しました。東京湾の出口に来ると、東に舵を切らずに、西に向かって走り出しました。これは、海底の探査に使う超音波を送信するための船底に備え付けた装置を、三菱重工下関ドックで修理するためでした。下関ではドライドックといって、ドックの中で大きな木枠に立ったまま水を抜いて行く作業をはじめて見る機会がありました。大きな白鳳丸が模型のおもちゃの船のようにドックの中に立っているのを見るのは初めての経験なので、大変感動しました。

翌日、造船所の関係者に見送られて、晴れて本番の航海に出航することになりました。太平洋に出てみると、冬の北太平洋の海況の厳しさを実感することになりました。くる日も来る日も、時化ばかり。幕末には、勝海舟の乗った咸臨丸が、米国に向かって冬の北太平洋を航海したときに、時化のために船体の一部が壊れてしまい、ホノルルに寄港して、補修したとのことを本で読んでいました。白鳳丸は東京と緯度の近い、San Diegoに向かっていたのですが、やむなく北緯30度まで南下して航海することになりました。航海中は厳しい海況のために、採水、採泥などでことごとく失敗が続きました。ピストンコアラーといって、通常なら海底の堆積物が約30 mは採取できる装置でも、コアがうまく海底に突き刺さらなかったために、船上に上がってくると、コアが折れ曲がっていて、まるで恐竜の首が船上に上がってきたようになってしまいました。特にひどかったのは、ゴーフロー採水器といって、20 Lの海水を各深度から採水してくる装置は、一度にロゼット状に20個を取り付けて下ろそうとしたところ、トラブルを起こしてしまいました。この採水器は下ろす途中の深度の汚染物質の影響を防ぐために、蓋を閉めたまま下ろし、目的の深度で蓋を開き、その後に蓋を閉じて上がってくる予定だったのが、20個を連装したために、この浮力が大き過ぎてウィンチのローラーからケーブルが外れてしまい、作動なくなってしまうのでした。このためにSan Diegoまではウィンチが使えなくなっていました。

さらに悪いことは重ねて起こるもので、研究者の多くが米国のビザを持っていないことが航海の途中で、明らかになってしまいました。これは海洋研究所の事務員の勘違いに起因していました。当時は旅客機で米国に入学するには、ビザは必要なくなりましたが、この事務員は旅客機の場合と勘違いをして、ビザはいりませんとアナウンスしていたのです。毎日の時化によるサンプリングの失敗とビザの件のために、私を含め多くの研究者もしらけていたのですが、なんとかSan Diego港に着くことができました。やっと到着したのに下船もできずに、船内にいると、白鳳丸の到着に関してのニュースを新聞等で見た、以前に米国からの留学生だったパスカル君が白鳳丸に来てくれたのです。現在は米国の外交官をしていると聞き、彼に会って状況を説明すると、彼は「全員のパスポートが集まれば、ビザを出すのは簡単ですよ」と言ってくれたので、たまたまビザをもって

いた故寺崎教授をお願いをして大使館に行ってもらい、全員のマルチビザが得られることになったのは、忘れられないうれしい思い出です。次の日からは現地にある、カリフォルニア大学スクリップス海洋研究所という世界一の海洋研究所と楽しい交流が行われたのは当然です。

2Leg (San Diego – Miami)

約1週間のSan Diego滞在の後に、Miamiに向かった航海がスタートしました。米国の沿岸であることもあって、今回は毎日の天候が平穏な楽しい航海でした。海況が良いと、観測は全て成功。調査をしながら、パナマ運河にやってきました。通行の順番待ちのために約2日間停泊することになりました。このときには面白いように立派なアカイカが釣れました。夕方になって、酒のつまみにしようと皆が酒を持って集まってくると、肉がものすごく塩辛いのです。とても食用にはならず、残念ながら、廃棄しました。パナマ運河通行の順番回ってきて、船上では緊張が走るようになりました。沢山の作業員が船上に乗り込んできて、船のデッキにロープをかけて、ロープで船を引っ張るような作業になりました。作業員には全員が注意を払って、船内の居室には入らせないようにと各研究員に指令が出されました。大西洋と太平洋の水位が異なるために、しばらく進むごとに閘門の開閉をしながら水位の調節をして進んで行きました。大西洋に出ると、ここはカリブ海。透き通るような海の中を航行してMiami港に12月11日に着きました。

上陸すると、Miami大学の教授をしている三井先生に大歓迎をして頂きました。三井先生は東京大学応用微生物研究所の元研究員で、石油などの脂質を産生する単細胞藻類株を沢山集めておられました。翌日には、マイアミの近くにあるEverglades National Parkへのバス旅行を企画していただき、広大な国立公園で*Spartina**の茂る湿原を大きな扇風機を後部に乗せたair boatですごいスピードで走り、船上での疲れも吹き飛びました。

私どもはMiamiで下船し、米国を旅行しながら、当時大学院生だった和田実君(現長崎大学水産学部教授)と日本に戻りました。

おわりに

本航海は、その後、Miamiを出発し、大西洋を横断し、ポルトガルのリスボン港、地中海を抜けてスエズ運河を通過、インド洋からボンベイ港に停泊し、無事に3月には晴海埠頭に戻ってきました。大西洋の横断の時には冬の大西洋の時化に遭って、ものすごく揺れたと聞いています。全航海に乗船していたのは、海洋研究所の教官と大学院生の6名と全国の大学から共同利用で乗船した大学院生が5名ほどいたと聞いています。

本当にご苦労様でした。

* 北米東部原産のイネ科の塩性植物。繁殖力が強く、アメリカでは干潟に広く生育する。

佐藤 伸二

五家荘に平家の落人の伝承があることは良く知られている。一方、御所浦には源氏にまつわる伝承がある。こちらはあまり広く知られていない。九州山地の五家荘と不知火海に浮かぶ離島の御所浦との間に、直接つながりがあるとは考えられないが、両者とも江戸幕府の直轄領（天領）であったこともあって、なんとなく共通したのがあると、私は感じている。

江戸時代の地誌『肥後国誌』には、椎原村・久連子村・樅（榎）木村・仁田尾村の五村を五箇荘という書かれている。また葉木村には腰越という小村が、仁田尾には小原村・奥村などの枝村があると書かれているので、集落としては7ヶ所以上で構成されていたようだ。地元の伝承も収録されていて興味深い。

元暦元年（1184）に紀州の那智に入水したことになる平維盛は、実はこっそりと熊野あたりに住んでいた。その子孫平清経が豊後国の緒方に落ちていき、緒方実国の娘を妻とした。その子が緒方清国である。清国の子孫たちが建長元年（1249）に肥後国八代郡の白鳥嶽に移住し、五家（緒方氏2人・雑座氏3人）に分かれて住み続けている。これがすべて史実であるかは別として、豊後国とかかわりの深い人々が住んでいたことは確かであろう。

別の伝承も色々と記載されている。その中には、緒方清国の子孫の一部が、八代郡龍ヶ峯に到り、狸谷山に一時潜んでいた。あるいは雑座氏は筑前大宰府から来た菅家の子孫で樅木・葉木・仁田尾は雑座領、久連子・椎原は緒方領であるなどあり、どの伝承が正しいのか分からないとも書かれている。これらは五家荘が九州山地の西側、八代平野あたりとの交流も古くからあったことを物語るものだろう。

江戸時代のことであるが、宇城市小川町には文政元年（1818）に五家荘仁田尾から杉樅板300間を買付けた荷送り手形が残っている。また、五家荘など九州山地の村々との交易で巨富を得た「塩売り勘兵衛」の話など小川商人の活動が『小川町史』に書かれている。五家荘は平家の落人が住み着いたまま、孤立していたのではない。東へ西へ南へ北へ、人と物の流れが行きかう九州山地の文化の十字路であったように思われる。江戸時代に天領となるが、このことによって周辺から孤立しているような思いが強くなったのではないか。

天草市の御所浦町は横浦島・牧島・御所浦島などからなるが、鹿児島県出水郡長島町の獅子島にも御所浦という地名がある。獅子島は戦国時代に島津氏に攻められ、その支配下に入るが、それ以前は天草郡の一部で広い意味の御所浦に含まれていたのではないだろうか。現在の御所浦町と獅子島あたりを含め、五つの浦で構成されていたことから五所浦と呼ばれたのが、後に御所浦に表記が変わったのであろう。

ここには景行天皇の寄港にちなんだ伝承がある。また、横浦島には「与一（与市）ヶ浦」、「弁慶山」があり、牧島には「頼朝越え」という小字があり、「義経の舟かくし」という場所もある。平家滅亡後の源氏一族の争いの物語、すなわち義経伝説もある。この話は弁慶山という地名をきっかけとしてできたものであろう。最も有名な弁慶山は山形県にあり、標高887mである。武蔵坊弁慶が源義経の供をしてこの山を越えて平泉に行ったので、この名があるというが、高い所を意味する「ベンケ」からきたアイヌ語地名の1つである。御所浦町横浦島の弁慶山（写真1）の標高は高くないが、頂頭部が尖っていて目立つ、これもアイヌ語地名なのだろうか興味深い。

御所浦町には、京泊・南風泊など中世の貿易港を意味する地名や五輪塔・宝篋印塔など中世の石造物もある。船での往来が盛んであったこの地は、江戸時代に天領になると、その東南端に位置するため、周辺との交流が自由にできなくなり、孤立感を深めた。御所という地名に高貴な人々とのつながりを感じ、人々は景行天皇巡幸や義経伝説を受け入れたのであろう。



写真1 御所浦町横浦島の弁慶山
倉岳町宮田では「ミヤタフジ」とも呼ばれている。

球磨川流域の土砂災害の危険性

上村 雄一

2015年8月25日、台風15号が球磨川流域を襲った。4時頃に水俣沖を通過し、5時頃に宇城に接近し、6時頃に荒尾市付近に上陸した。地域差はあるが全体としては、球磨川流域での雨量は特別に多くなく、風雨も強くなかった。しかし、被害は甚大であった。とくに、球磨村渡地区から八代市坂本町古田にかけての球磨川流域の土砂崩れ・倒木は、これまでに経験したことのない規模であった。

球磨川沿い（肥薩線、国道219号線）中心に被害は発生した（写真1～3）。紙面の都合で2箇所について被害状況を例示するに止めるが、同様の箇所は数多くある。とくに、瀬戸石ダム近くの土砂崩れについては、同ダム堤体破損につながりかねいと危惧する（写

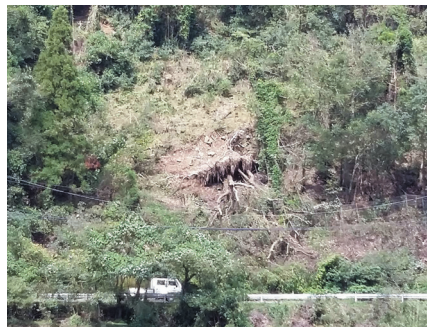


写真1 球磨川流域（瀬戸石）の土砂崩れ

写真2 球磨川流域（瀬戸石）の土砂崩れ

写真3 坂本橋下流の土砂崩れ

真4,5)、同ダム近隣は、昔から山腹崩壊を繰り返してきた。宝暦5年（1755年）の山腹崩壊はとくに有名で、瀬戸石山（球磨川左岸）が崩壊したのち、その反動で対岸の楮木山も崩れて「自然のダム」をつくり、球磨川をせき止めた。しかし、せき止められた球磨川の水は「自然のダム」を一挙に破壊し、濁流となって下流のみ込み、八代町にも流れ込み、多数の死傷者をだす大惨事になった。この宝暦の災害は長雨のあとの豪雨の結果であったが、今回はそうではない。長雨でもなく、大雨でもなかった。被害規模が違うため、単純には比較できないが、急傾斜地のため、土砂崩れしやすい事情は同一である。

倒木被害も顕著である（写真6）。土砂崩れ箇所は完全に復旧していない。倒木処理もほとんど進んでいない。現在の状況で



写真4 瀬戸石ダム付近の土砂崩れ

写真5 瀬戸石ダム付近の土砂崩れ

写真6 深刻な倒木被害

長雨（梅雨）になった場合、被害箇所を中心に大規模な災害が発生する危険が十分にある。それでは、どうすればよいであろうか。短期的課題と長期的課題があるであろう。短期的課題は「応急措置」である。予算は限られている。危険度を考量し、順次、復旧を図っていくしかない。降雨量に注意し、状況によっては、肥薩線・国道219号線の通行を禁止する措置も必要になる。しかし、両者は基幹の通路である。通行禁止の措置をとるのは必ずしも容易ではない。今回、土砂崩れから25日後には肥薩線の運行を再開している。素人目には、早すぎる運行復旧にみえた。運行を再開しなければ、人吉市を中心とする地域経済が致命的な打撃を受けるだろうという事情を考量した結果であるように思えた。長期的には森林整備につぎ。だが、これがひどく難しい。山林労働者の減少に歯止めがかかっていない。その帰結でもあるのだが、鹿の増殖も顕著である。山林崩壊の悪循環が強まっている。「山林整備」の提案は簡単である。問題は実行できるかにある。ハザード・マップづくりも重要である。緊急度からすれば最優先課題だ。避難場所・そこまでの経路を示すだけであれば、そのようなマップは不要である。実際に役立つマップが必要である。このことに誰も異論はない。しかし、現実には、それはひどく難しい課題である。避難場所を設定すること自体が不可能な地域が多い。地形を変えることができない以上、「逃げる」しかないが、その場所がみつからない。結論を述べる能力はない。台風15号の被害が甚大であったこと、土砂災害の危険が現在も継続している状況を記録にとどめておくしかない。

球磨川流域の山歩記 第1回・仰烏帽子山（のけえぼしやま・のけぼしやま）

高平 雅由

仰烏帽子山は人吉・球磨盆地の北に位置し、南の白髭岳、西の市房山と共に球磨三名山のひとつに数えられている。地元では「のけぼし」と呼ぶ。標高 1,302 m。福寿草のシーズンには九州各地からたくさんの登山客を集め、その集客力は九州脊梁山地で一番かもしれない。そもそも花というものにそれほど興味がなく、ましてや大勢の人間でごった返す山なんてまっぴらご免な僕としてはこのシーズンを避けていたのだけど、なぜかシーズン真っ盛りの晴天の日曜日（2月28日）に登ってみた。怖いもの見たさ、何事も経験だ。

コースタイム 2月28日（日）

椎葉谷登山口 7:55～仏石分岐 8:30～仏石（ほとけいし）8:56～展望台 9:45～山頂 10:03-10:25～仏石 11:06～11:40～仏石分岐 12:08～椎葉谷登山口 12:41（写真1）

仰烏帽子山には登山コースが3つある（写真2）。1つは元井谷コース。ここは第1と第2の登山口があり、第2登山口から山頂を目指すのが一番楽なコースだ。広い駐車場もある。2つ目は、万江川からその支流宇那川沿いに林道を上り詰めた、峠からの稜線コース。こかも高低差が少なく山頂までの距離が一番短い。じつは2月3日にこのコースから登ったのだが、その登山口に至るまでの林道が崖崩れで、車は通行止めに。おかげで、「登山口まで林道を延々5km歩く」という悲惨な目にあつたのだった。で、3つ目が今回登った椎葉谷コース。3つのうちでは、一番厳しいが変化に富んだいいコースだった。

7:55 椎葉谷登山口

シーズンと言っても椎葉谷の登山口は閑散としている。ちょっと早かったかなと思ったが、先行者の車が1台だけ駐車場に止まっていた。身支度をしていると、軽トラが一台やってきて中年の女性が下りてきた。「こんにちは」山仕事なのかな？

山歩き開始。5分ほど重機が作った作業道を鹿ネット沿いに歩く。

8:13 牛の鼻ぐり岩（写真4）「這って通り抜けられます」と立て札には書いてあったが、「腹回り何センチまでの人は」という断り書きがなかったので、もちろんパス。途中から枯沢歩きになる。兩岸は見上げるばかりの崖だ。

仏石への分岐点：沢の途中で道しるべのテープが両岸に分かれている場所に来た。事前に調べていなければ迷うところだ。右の斜面に取りついて今度は滑る粘土質の山を仏石を目指して登る（写真5）。



写真3 作業道路に設置された鹿ネット



写真4 牛の鼻ぐり岩



写真5 仏石への分岐点



写真1 今回の登山コース



写真2 登山口に設置された登山コースを示す看板



写真6 鎖場



写真7 ニセ仏石



写真8 これが本物の仏石

鎖場：ピークが近づいてくると、石灰岩の山らしくなってくる（写真6）。

8:52 ニセ仏石：おお、これが仏石か!? と感激もつかの間、次々と切り立った石灰岩の岩峰が現れる（写真7）。

8:56 リアル仏石！これが本物の仏石（写真8）。こっち側から見るとたいしたことはないように見えるが、「登ってはいけません」という立て札にもあるように、反対側は切り立った絶壁だ。

8:58 花畑：岩峰の谷間にロープに囲われて福寿草の花畑が広がっていた（写真9）。群落地の1つなのだが誰もいない。前日の情報では、元井谷第2登山口の手前の自動車道に崩落があり、車が入れないとのことだったので、日曜日にも関わらず登山客が少ないのかもしれない。福寿草に興味はないと言っても、深山にひっそりと咲くのはやっぱり可憐だ。まだ時間が早いせいか、花卉が開ききっていないが、思わず写真を撮ってしまう。狐につままれたような気分だけれど、この空間を独り占めにできるのは、なんて贅沢なことだろう。モミやイチイ、ブナの尾根筋を山頂へ、鹿の食害なのか？は、分からないけど、下草はほとんど生えていない（写真10）、所々崩壊している。



写真9 可憐な福寿草



写真10 下草がない

9:29 風穴（写真11）「風穴」という名前から、涼しい空気が出ているのだろうと思ったら、獣の息のような湿った生暖かい風だった。夏だと涼しく感じられるのかもしれない。山頂に向かう山道からちょっとはずれて展望台へ（写真12）。



写真11 風穴



写真12 展望台からの風景



写真13 家庭の和職 場の和から 無災害



写真 14 仰烏帽子山からの眺望



写真 15 登山者で混雑する山頂

9:45 展望台 南方方向に開けていて登ってきた椎葉谷が見下ろせる。東方向には市房山も見えるはずだけれど、遠く霞んでいた。初めて人の話し声がか聞こえてきた。山頂からだろう。先客がいるみたい。家庭の和職？(写真 13) ホオノキ、ナツツバキ、ハイノキと書かれた札のぶら下った木々の間を山頂に急いでいると、「家庭の和職 場の和から 無災害」と書かれた看板が落ち葉に埋もれていた。改行位置が変なんだな。

10:03 山頂 (写真 14) 山頂には先客が5人。男二人連れは僕と入れ替わりで下山へ。残った三人はコーヒーを入れて飲んでいる夫婦と、北九州から来たという40歳ぐらいの男性。夫婦は元井谷の第2登山口から登ってきたという。昨日のうちに崩落した土砂を片付けて、道を通したらしい。しばらく4人で山談義をしていたら、次々と登山客がやってきた(写真 15)。仰烏帽子山の山頂は広くない。長居は無用と、おにぎりを2つ水で流し込んで、僕もさっさと退却することにした。下り始めてすぐに、先に出発した二人組に追いついた。そこから仏石までは、まさに聞きしに勝る混雑具合。次から次に現れる合計100人ぐらいの登山者から、「こんにちは」の波状攻撃。ただ、ただ、道を譲って、「こんちは」と答え続けるしかないのだった(写真 16)。聞くと元井谷第2登山口の駐車場には、もうマイクロバスが何台も駐車しているそうな。

11:06 再び仏石まで下りてくると、そこはお花見会場と化していた。朝の静けさが嘘のような人の群れ。福寿草も媚びを売るように、辺り一面に咲き誇っていた(写真 17)。「上の方にもいっぱい咲いているよ」と言われたので、人をかき分けるように、元井谷の方に登ってみた。しかし、僕的にはちょっと花びらが開きすぎて、朝の可憐さがないような気もして、登山者見物をすることにした。もう圧倒的に高齢者が多い。それも女性が、ぼくもそこそこの年寄りだと自覚しているが、ここはデイサービスの施設かと見まごうばかりだ。そして、これがまたみんな元気なんだな。カラフルなウェアに身を包んだ山ガール(元)たちの笑い声で、石灰岩の谷間は春の陽気だ。こういう山もたまにはいいかな。ということで、元気を取り戻して、静かな椎葉谷へひとり下りることにした。人気のない椎葉谷コースだが、途中で10人ぐらいの登山者に会った。これから登るのかと思ったが、福寿草目当てなら遅くはない。山頂を目指さない登山もあるのだ。登山口に帰ると、駐車場にはそれでも10台ぐらいの車が合った。軽トラックもまだ駐車したままだった。

今回、椎葉谷を選んだのは、前日に登った人の登山サイト情報で、元井谷第2に車で行けないことを知ったからだった。さらに、その前日にの登った人の書込では、第2登山口まで行けたとあった。さらにその数日前までの長い間は、第2までは行けなかったのだ。2月



写真 16 登山道の賑わい



写真 17 福寿草の群生

3日には宇那川林道コースを選んだのだが、その林道も酷い有様だった。多くの人を集めるこのシーズンだから、観光コースとも言えるルートは必至で道の修復をしているのだろう。しかし、仰烏帽子山に限らず、最近の山の荒れ方は酷い。山頂は乾燥化し、山肌は削られ、風や雪で倒れた杉山もそのままにされていたりする。伐採用の作業道で登山道がズタズタにされ、ルートをロスしたこともあった。山の生物と林業者の間を細々と登らせてもらう登山者は、その行く末を心配することしかできない。せめて登山者としてのマナーぐらいは守ろう。

「不知火海・球磨川流域圏学会誌」販売

■最新号 vol. 9 No.1 (2015年) 1,000円

- 【原著論文】 球磨川水系川辺川における過去 95 年間の豊水、平水、低水、濁水比流量の長期変動
..... 蔵治 光一郎
- 【原著論文】 シカメガキ（クマモト・オイスター）養殖の過去・現在・未来 永田 大生
- 【原著論文】 ヒジキ増殖手法の確立と普及に向けた取り組み 長山 公紀
- 【原著論文】 八代海佐敷干潟におけるアサリ個体群の季節変動
..... 徳永 吉宏・原口 浩一・八里 政夫・堤 裕昭・一宮 睦雄
- 【研究ノート】 茶不況期における熊本県の茶生産構造 新井 祥穂
- 【流域いろいろ】 最近の天草でのスキューバダイビング 中野 誠志
- 【平成 25 年度研究会発表記録】 人吉・球磨のおもしろ考古学 木崎 康弘

■ vol. 8 (2014年) 800円

- 【原著論文】 瀬戸内海の実環境保全と里海をめぐる新たな動き
- 【研究ノート】 塩トマトのおいしさについて
- 【流域いろいろ】 『干潟ベントスフィールド図鑑』の製作と生物多様性を浸透させる取り組み／現在の水俣の海／宇城市松橋町付近の農業用水～大野川流域の溜池～／三角西港の文化的景観調査から
- 【記録】 日本初のダム撤去の現場からの報告 荒瀬ダムのこの1年(4) - 2013年 大きく進んだ本体の撤去工事 - 撤去の現場からみたダム撤去におけるHEP適用の期待と課題
- 【平成 24 年度研究発表会記録】 宇城市商店街の今昔／「醸造業における自然と健康」 - 松合食品(株)における取り組み -

■ vol. 7 (2013年) 800円

- 【原著論文】 HEPを用いたダム撤去事業における定量的影響評価／球磨川河口域の金剛干拓地先の砂質干潟におけるアサリの棲息を制限する要因
- 【研究ノート】 タケにおける節の役割／八代海におけるクロツラヘラサギ (*Platalea minor*) の越冬状況／底質硬度とアサリ資源量の関係
- 【流域いろいろ】 交通路としての球磨川-人吉八代ルートの成立 - 「干潟生物の市民調査」研修会で育成した人材による八代海ベントス相調査の実施
- 【記録】 日本初のダム撤去の現場からの報告 荒瀬ダムのこの1年(3) - 2012年 撤去工事始まる - 東日本大震災被災農地復興に向けて
- 【平成 24 年度研究発表会記録】 種山石工の活動

※創刊号 vol. 1 (CD販売のみ), vol. 2～vol. 6の在庫もあります。

■申込方法：下記宛に必要部数、お名前、ご住所、送り先をお知らせ下さい。

- ・E-mail : tsuru.shoko@gmail.com (総務：つる 詳子)
 - ・facebook 「不知火海・球磨川流域圏学会」 <https://www.facebook.com/shiranuikuma> のメッセージ欄
- ※ 10 冊以上は、割引サービスがあります。

■お願い：図書館や公民館など学会誌を購入して下さるところをご紹介下さい。